長野大学紀要　第22巻第4号　138—148頁（450—460頁）2001

日露戦争前における在満日本人の動向

The situation of the Japanese in Manchuria prior to the Russo-Japanese War

塚瀬　進*
Susumu Tsukase

目　次

はじめに
第1章　満洲北部への日本人の流入
第2章　満洲南部への日本人の流入
(1)　営口の日本人
(2)　旅順・大連の日本人
(3)　奉天・遼陽の日本人
むすびにかえて

はじめに

日本人が満洲に大挙して流入するのは日露戦争後のことである。日露戦争後に形成された在満日本人社会の動向、問題点については研究が進められており、在満日本人が日本軍の出動を歓迎したり、日本という国家に多大な依存心を持っていた側面などが明らかにされている[1)]。しかしながら、日露戦争以前にも2000～3000人程度の日本人が満洲に居留していた事実も見逃せない（図1参照）。日露戦争により獲得した満鉄や関東州などの権益が、在満日本人の動向に及ぼした影響を明らかにするには、日露戦争前の状況と比較して考察する必要がある。

日露戦争以前における在満日本人について考察を加えた研究には、曽村保信[2)]、今井庄次[3)]の論稿がある。だが、いずれも在満日本人の状況を指摘するにとどまり、その性格や特徴にまでおよぶ論点は主張していない。本稿では、現在利用できる史料を可能なかぎり参照して日露戦争前の在満日本人の状況を明らかにし、日露戦争後の動向と対比させてみたい。

1）代表的な研究としては、柳沢遊『日本人の植民地経験—大連日本人商工業者の歴史』青木書店、1999年があげられる。
2）曽村保信「日本の資料から見た日露戦前の満洲シベリア問題」『近代史研究—日本と中国—』小峯書店、1958年。
3）今井庄次「日露戦争前後満州在留日本人の分布状態」『歴史地理』89巻3号、1960年。

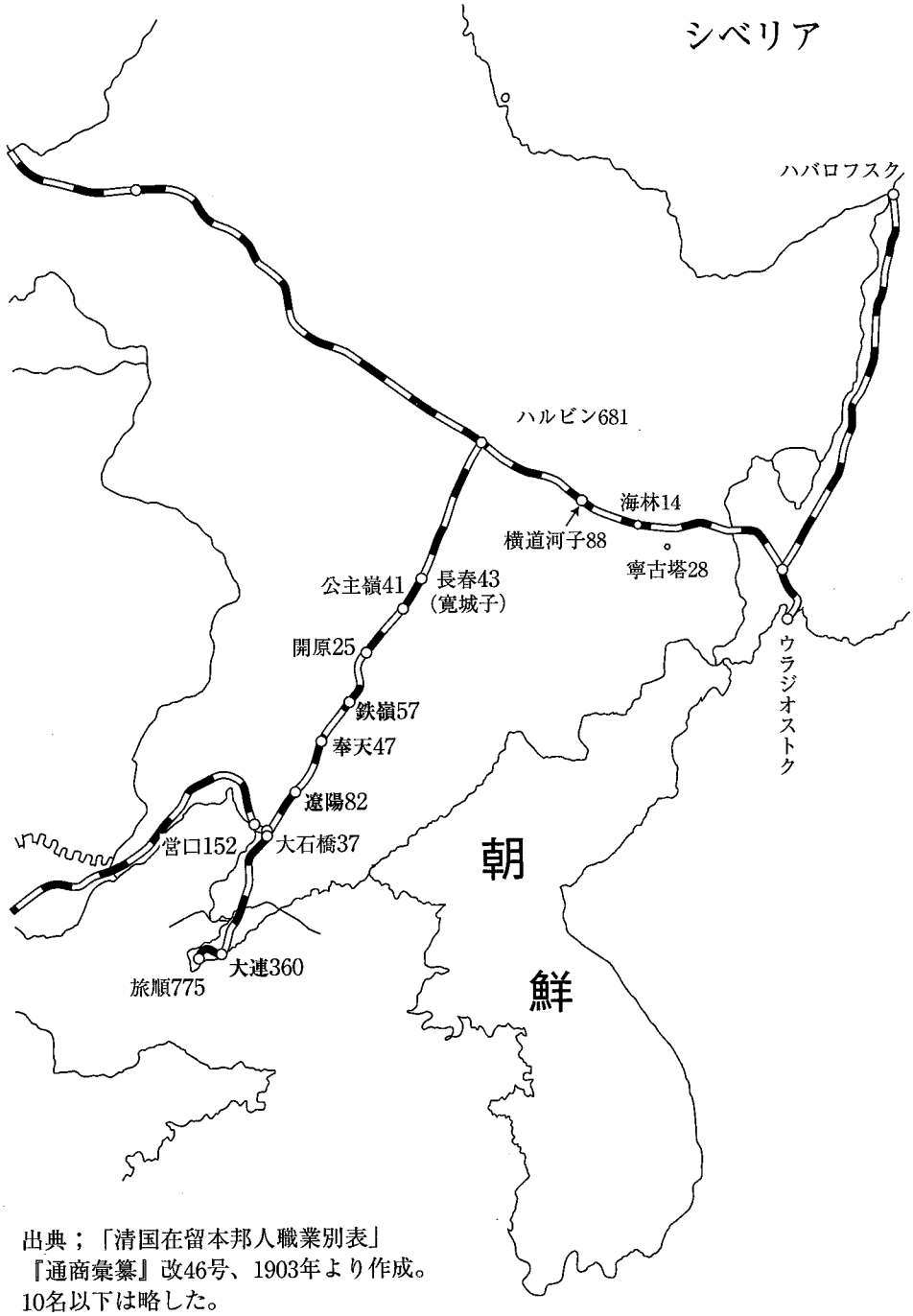
1．満洲北部への日本人の流入

日本人が満洲北部に流入する契機は、ロシアが東支鉄道の建設をはじめたことから生まれた。東支鉄道が建設される以前の満洲北部は、住民もまばらな未開拓地が広がる、荒涼とした場所であった。ところが、ロシアが1896年に東支鉄道の敷設権を獲得し、1898年から建設工事をはじめたため満洲北部は建設景気にわいた[1)]。なかでも著しく発達したのはハルビンであった。ハルビンは1898年にロシアの鉄道建設隊が着いた時には数戸の中国人家屋が立っているに過ぎなかったが、大連に通じる東支鉄道支線の分岐点となったことから急速に成長した[2)]。以後、ハルビンは満洲北部の政治・経済の中心地として発展し、1922年には人口18万人に、1930年代には50万人を越えていた[3)]。

満州北部には鉄道工事に従事するロシア人が流

* 講師

図1　満洲の在留日本人数（総計2525名）—1903年6月—



出典；「清国在留本邦人職業別表」
『通商彙纂』改46号、1903年より作成。
10名以下は略した。

入し、これに伴って来る日本人がいた。ハルビンへ最初に来たとされる宮本千代は、ロシア人の女中として1898年にウラジオストクから来たという[4]。鉄道建設に伴い、工事の請負いや建設労働に従事する日本人も流入していた。例えば阿川甲一（1870年山口県生）は、1893年にロシア語の習得と商業調査を目的にウラジオストクへやって来た。その後、ウスリー鉄道や東支鉄道の建設工事を請負い財をなし、日露戦後は満鉄や関東庁の指定請負人となっていた[5]。軍事密偵としてハルビンを中心に活動していた石光真清は、東支鉄道の建設現場で働く日本人に会っていた[6]。

満洲北部に入ってきた日本人はウラジオストクやウスリー地方にまず入り、東支鉄道の建設開始とともに満洲北部にやって来ていた。職業としては、ロシア人の世話をする女性（多くは売春婦と考えられる）と建設工事に従事する日本人という二種類が代表的であった。当時の状況を牛荘領事（1902年8月27日附報告）は次のように述べている[7]。

> 東清鉄道工事創始以前ニ於テハ固ヨリ、満洲内地ニ本邦人ノ在留スヘキ術モナカリシモ、数年前該鉄道工事ノ開始ト同時ニ西伯利亜地方ニ散在セル本邦婦女ハ満洲内ニ移住シタル結果、本邦婦女ノ数ハ哈爾賓ヲ中心トシテ其附近各地方ニ於テモ俄カニ其数ヲ増加シ、隨テ彼等ノ日用品供給ノ必要ヲ感スルコトトナリタルヲ以テ、雑貨商モ来住シ次テ洗濯屋等モ来リタルモノナリト雖モ、今日ニ至リテハ満洲内ニ於テハ洗濯業ハ殆ント日本人ノ専業ニ帰シ、至ル所歓迎ヲ受ケテ其収利亦少カラスト云フ

まず日本人女性が流入し、それに続いて日本人女性を相手とする雑貨商がやって来たという様子を述べている。日本人売春婦は19世紀末にウラジオストクを中心にシベリア各地に流入していた[8]。その一部が東支鉄道の建設に伴い、満洲北部へと向かったのであった。ハルビンに初めてできた日本人経営の店は料理店であったらしい。その様子は次のように伝えられている[9]。

> 一番はじめに出来たのは植村、富田両氏の共同出資に成る日本料理店で、女はブラゴエから呼んだのでした。それまで植村らは私のところで遊んでゐたが、いよいよ料理店をつくることになって、ブラゴエまで出かけて、女を集めて来たのです…。

この記述から、ハルビンにおける日本人最初の店であった料理屋は、料理を出すだけの飲食店ではなく売春婦を準備した「貸席」であったと考えられる。

売春婦を軸にしてハルビンへ流入した日本人は、義和団事件による混乱のため一旦は引上げを余儀なくされたが、すぐに戻り、ハルビンに一つの集団を作っていた。北京公使館から満洲視察に派遣された島川毅三郎は1902年2月にハルビンを訪れた時、在住日本人の様子を次のように記している[10]。

> 日本人ノ哈拉賓ニ居住スルモノハ約五百名ニシテ、松花倶楽部ナル団体アリ。新旧哈拉賓及波止場区共ニ居住スルモ、其最多数ハ波止場区ニシテ一町内ハ殆ント日本人ノミヲ以テ満サレムトス。其営業ノ重ナルモノハ貸座敷及醜業婦ノ所持品タル呉服反物、雑貨ヲ鬻ク店舗、日本人ノミヲ相手ニセルモノハ大和商会、安田商会、写真屋菊池ト「ラムネ」製造者ニ過キス、床屋、洗濯屋、時計屋モ亦四、五軒アリ。今此地ニ居住スル邦人ノ実相ヲ観察スルニ、醜業婦先駆シテ其版図ヲ開拓シ、之ニ次イテ彼等ノ需要品ヲ供給スル者来リ、其商人中醜業婦又ハ貸座敷主ノ信用ヲ博スルモノハ彼等ヨリ資本ヲ借入レ、漸次其店舗ヲ拡充スルモノノ如シ、是ヲ以テ貸座敷ハ実ニ日本人中ノ資本家ニシテ其実ハ一種ノ銀行ナリ。

既述の牛荘領事の報告と同様に、「醜業婦（売春婦）」がまず来住し、ついで売春婦が需要する雑貨を販売する日本商人がやって来るという状況を述べている。興味深いのは、雑貨商は「醜業婦」や「貸座敷主」から資金を借り、商売を拡大していたという点である。当時ハルビンに住んだ日本人で、財産を持っていたのは「醜業婦」や「貸座敷主」であり、資金を欲する者は彼らの機嫌をうかがう必要があったと考えられる。

やや詳しいハルビンの人口統計で最も古いものとしては、1903年5月の統計があげられる（表1）。過半数以上は清国人（中国人）が占め（70

%)、ロシア人も約1万5000人を数え、全体の38%を占めていた。日本人は総数の1%程度であったが、女性（252人）のほうが男性（210人）よりも多いという動向を示している。清国人、ロシア人の男女比率は男性のほうが断然多い。女性の職業内訳に関する統計は存在しないが、女性が少ないという新開地の特性が売春婦の需要を高め、日本人女性の流入を促すという社会的背景を作っていたと考えられる。

表1　ハルビン人口（1903年5月）

国籍	男	女	計
清国人	27843	495	28338
ロシア人	10775	4804	15579
日本人	210	252	462
韓国人	29	1	30
ドイツ人	18	4	22
フランス人	6	2	8
イギリス人	3	0	3
その他	98	35	133
総計	38982	5593	44575

出典；「哈爾賓在留各国人数」『通商彙纂』改40号、1903年より作成。

日露戦争前にハルビンへやってきた日本商人も、ほとんどがウラジオストクやシベリアから流入して来た。鈴木定次郎（1872年千葉県生）は1893年に商業実習の名目でウラジオストクに渡った。1899年にブラコヴェシチェンスクで貿易業をはじめたが、1901年にハルビンにやって来た。ハルビンでは貿易業を中心に家具製造業や室内装姉業も営み、ハルビン日本人会（後述する松花会）の初代会長に就任した。日露戦後はウラジオストクに移り活動していたが、1914年に再びハルビンで雑貨貿易業をはじめた[11]。高木與蔵（1881年福島県生）は、1899年にニコライエフスクを経由してハバロフスクに渡り、1901年にハルビンに移り雑貨食料品の販売をはじめた。日露戦争後は満洲里やニコリスクで営業していたが、1922年にハルビンへ戻り海産物を主とする食料品の卸売、小売をしていた[12]。ハルビン草分けの日本商人は営口からではなくシベリア経由で流入していたので、その監督も営口の日本領事館ではなく、ウラジオストクの日本貿易事務館のほうが詳しく掌握していた[13]。総じてハルビンの日本人は、ロシア人を相手にする術を身に付けた人が多かった。

ハルビンに住む日本人を悩ましたのは居住権が不安定なことであった。ハルビンは日本と清国が結んだ条約によって認められた開港場ではなかった。したがって、ハルビンに住む日本人はロシアが東支鉄道付属地として獲得した地区に、ロシア側の許可をもらい居住していた。また商店の営業に際しても、ロシアの警察署の認可を得る必要があった。こうした状況を「領事報告」は、「本邦人営業立脚ノ地盤固ナラサルハ独リ哈爾賓ノミナラス…満洲内地在留ノ本邦人ハ目下単ニ露国ノ黙許ニヨリ假住セル姿ニシテ、何時立退ヲ命セラルヽモ計ルヘカラストヲ実ニ不安ノ思ヲナシ居ルモノヽ如ク」と述べている[14]。このように居住権が不安定であり、何事につけてロシア側と交渉する必要があったため、ハルビンの在住日本人は松花会という団体を設立（1901年創立）し対応しようとしていた[15]。

ロシアによる東支鉄道敷設をきっかけに、満洲北部に流入する日本人は増え、1902年4月には奉天以北に居留する日本人は1006名（男545名、女461名）になった。男性の職業では大工や石工などの建設業やロシア人相手の洗濯業、雑業が多かった。女性で多いのは「貸席」（売春婦）であった[16]。日露戦争前において満洲北部に流入した日本人の職業は、鉄道の建設に従事する労働者と鉄道建設により流入したロシア人を顧客とする洗濯業や売春婦であったとまとめられよう。そしてシベリア、ウラジオ経由で満洲北部へ流入した人が多かった[17]。満洲南部から北部へという経路で日本人が流入するのは、1901年に東支鉄道南部線が開通した以後であった[18]。芝罘領事が1902年にした報告には、「近来東清鉄道ノ全通セシニヨリ当港（注；旅順）ヨリ…奉天、鉄嶺、開原、哈拉賓等ニ赴キシモノ亦少ナカラストイフ」とあり、東支鉄道の全通が南部から北部への流入を促したことを述べている[19]。

ハルビンを中心に満洲北部に居留した日本人が、日本とロシアの開戦は不可避と考え引き上げ始めたのは1903年10月からであった[20]。そして

1904年2月の日露宣戦布告後に引き上げ命令が出され、ほとんどの日本人が引き上げた[21]。

1）東支鉄道の概要については、拙著『中国近代東北経済史研究』東方書店、1993年、52～53頁を参照。
2）David Wolff. *To the Harbin Station. The Liberal Alternative in Russian Manchuria, 1898-1914.* Stanford University Press, 1999. pp. 25-27.
3）前掲拙著、55頁。ハルビンという地名の沿革については、黒崎裕康により詳細に検討されている（黒崎裕康『哈爾浜地名考』地久館、1995年）。
4）『北満草創（邦人発展史）』哈爾浜日日新聞社、1931年、11～12頁。
5）『日本人物情報体系11　満洲編1』皓星社、1999年、412頁、『同12　満洲編2』214頁。
6）石光真清『荒野の花』中公文庫、1978年、163～165頁。
7）「露国東清鉄道並湾洲内地在留本邦人情況」『通商彙纂』247号、1903年。
8）倉橋正直「シベリアを流浪した女たち」『北のからゆきさん』共栄書房、1989年。土岐康子「極東ロシアと日本人娼婦」『ロシア史研究』57、1995年。
9）前掲『北満草創（邦人発展史）』20～21頁。
10）外務省外交史料館所蔵文書1－6－1－14「島川毅三郎満洲視察報告」
11）『日本人物情報体系12　満洲編2』279頁。『満洲草分物語』満洲日日新聞社、1937年、72～82頁。
12）『日本人物情報体系13　満洲編3』41頁。
13）戸水寛人『東亜旅行談』有斐閣書房、1903年、193～194頁。
14）前掲「露国東清鉄道並満洲内地在留本邦人情況」。日本と清国間の条約によりハルビンが開港場に指定されたのは、日露戦争後の1905年12月に調印された「日清満洲に関する条約」の付属協定第一条においてである（『日本外交年表並主要文書』上、原書房、1965年、254頁）。
15）前掲『北満草創（邦人発展史）』59～62頁。
16）「満洲在留本邦人数並其職業」『通商彙纂』219号、1902年。
17）入江寅次が「邦人の満洲発展は、シベリアから発源する」と述べている点は、現在でも評価できよう（入江寅次『邦人海外発展史』1942年、431頁）。
18）満鉄調査課『露国占領前後ニ於ケル大連及旅順』1911年、53頁。
19）「旅順口並大連湾情況」『通商彙纂』247号、1903年。前掲『北満草創』72頁では、南部からハルビンに日本人が入ってきたのは1903年からとしている。
20）営口瀬川領事→小村外相「日露開戦説続報ノ件」明治36年10月19日（『日本外交文書』第36巻第1冊、1957年）891～892頁。
21）すべての日本人が引き上げたのではなく、引き上げに間に合わず残留した日本人もいた。例えば、お菊、お玉という売春婦は最後の引き上げ列車に間に合わず、引き上げることができなかったという（前掲『北満草創（邦人発展史）』127～132頁）。

2．満洲南部への日本人の流入

(1) 営口の日本人

満洲において日本人が最初に流入した場所は営口（条約上では牛荘と称されたが、本稿では営口と記述する）であった。営口は1861年に開港場となり、19世紀においては満洲唯一の貿易港として栄えていた。1876年に日本政府は営口での領事業務を始めたが（天津領事館所管）、営口在住の英米人を副領事や領事代理にして領事業務を行っていた。日本人領事が常駐するのは日清戦争後の1897年であった。こうした領事館のあつかいは、営口に居住する日本人が少なかった点に起因した[1]。1891年に日本郵船が神戸との間に定期航路を開いたとはいえ、営口に住む日本人は増えなかった[2]。1893年8月23日附の芝罘領事代理書記生の報告は、営口に住む外国人の様子を次のように記している[3]。

> 居留外国人ハ凡ソ百二十名ナリ。内七十餘名ハ宣教師、四十餘名ハ官吏ト商人ナリ。其内日本婦人七名アリ。…七名ノ婦人中一名ハ清商東順記ノ内妾トシテ同家ニ引取ラレ、他ノ六名ハ一戸ヲ貸借シテ之ニ住ミ、賤業ヲ以テ口ヲ糊スル者ナリ。

営口に居住した最初の日本人は売春婦であり商人ではなかったのである。

居住人口は増えなかったとはいえ、1890年代に入ると日本との貿易が注目を集めるようになった。三井物産上海支店に勤務していた山本条太郎は、1891年に営口を訪れ、「満洲一番乗り」を名乗ったという[4]。1894年4月12日附の芝罘領事館報告は、営口の日本人について以下ように述べている[5]。

> 日本人ハ目下賤業婦九名、洋人ノ妾数名アルノミナリシガ、近年本邦該地間ノ貿易大ニ進歩シ後来ノ望アルヨリ我当業者ノ注意ヲ促シ、三井物産会社ハ昨年（1893年）ヨリ開河

中社員ヲ派出シテ穀類ノ買付ヲ試ミシニ、好桔果ヲ得タルヨリ本年モ已ニ其社員ヲ出シ専ラ豆類ノ買付ニ従事シ居レリ。其他商業視察ノ為メ客冬ヨリ滞留シタル大阪商人三名アリ。是ヨリ日本人ノ該地ニ往来スルモノ漸ク増加スルニ至ラン。

居留日本人は依然として売春婦という状況は変わっていないが、大豆の買い付けや商業視察にやって来る日本人が増えていたことを伝えている。とはいえ、ようやく営口が日本人の貿易先として視野に入ったに過ぎず、営口の対日貿易が発展するのは日清戦争後であった。日清戦争の時、外務省が保護した営口在留の日本人は17、18人であったという[6]。

日清戦争後、営口～日本間の貿易は拡大し、とくに大豆、豆粕の日本への輸出は増えた[7]。日清戦争中、営口は日本軍に占領されたことから、日本軍とともに営口に来り、戦後も営口に残り商売をはじめた日本人が出ていた。その様子を1896年の領事報告は次のように述べている[8]。

（日清）戦争前ノ開業ニ係ルモノハ三井洋行ノミ。当時当港在留ノ日本人トシテハ会社ノ派出員一人ノ外ハ十数名ノ醜業婦ノアルノミナリシガ、戦争中軍隊派遣ニ随従シ来リタル商人ニシテ、昨年中当地ニ開舗シタルモノ三軒ニ及ビ、軍隊撤去ノ後モ依然其業ヲ継續シ今ヤ十数名ノ在留商人ヲ見ルニ至レリ。之ニ反シテ彼ノ醜業婦ハ開戦ノ当時引揚ゲタル以来未ダ其片影ヲ認ズ。今春来那威汽船某號ニテ一二名密来セリトノ噂アレドモ、在留邦人ニシテ其影ヲ見タルモノナシト云フ。

日清戦争後、新たに3軒の日本商店（日清洋行、福富洋行、海仁洋行）が開業したこと、売春婦は減少したことを報告している。営口で対日貿易を営む日本商人が生まれていたとはいえ、この領事報告は中国商人との競争は難しい状況も報告している[9]。

彼等（清商）ハ巨大ナ資本ヲ有スル上ニ、能ク神戸上海ノ全国商ト連絡ヲ通ジ取引頗ル敏捷ナリ。加フルニ当港ノ如キ商業ノ基礎唯信用ノ二字ニアリテ百般ノ取引（小口取引ハ格別）大抵皆手形ヲ以テ行ハルヽ處ニテ薄資ニシテ事情に疎キ外人ニシテ一朝遽カニ彼等ト市場ニ競争セシコト頗ル難カルベシ。

1898年12月時点での在留日本人は男性13名、女性5名の合計18名という少数ではあったが[10]、対日貿易を目的に営口にやって来る日本人があらわれていた。松倉善家（1870年熊本県生）は、1894年に日清貿易研究所を卒業した中国通であり、1899年に農商務省の属託として営口に派遣され商品陳列館の運営を任された[11]。その後、松倉は東肥洋行（日本雑貨の輸入）という貿易商店の経営をおこなった[12]。広瀬庸三（1876年京都生）は、1896年に父親の経営する福富洋行を手伝う目的から営口にやって来た。1903年に独立して大連（青泥窪）で貿易業をはじめ、日露戦後も大連で大豆取引をしていた[13]。この福富洋行には広瀬金蔵（1881年兵庫県生）[14]、小杉佐一郎（1876年滋賀県生）[15]といった、その後も満洲で商業を行う日本人が勤めていた。

大豆の買い付けや日本製雑貨の販売を目的に訪れる日本人が増えるなか、営口は1900年8月4日に義和団平定を主張するロシア軍に占領された。以後、営口はロシア軍の軍政下に置かれた[16]。ロシア軍の軍政は、営口の日本人に従前と同じ活動を認めていた。農商務省嘱託として派遣された木村彖市による1901年8月の調査は、横浜正金銀行支店、三井洋行（反物販売、大豆豆粕輸出）、海仁洋行（汽船取扱、石炭枕木売り込み）、兼松洋行（大豆豆粕輸出、雑貨販売）、高松洋行（豆類輸出）、福富洋行（大豆豆粕輸出、雑貨販売）、東肥洋行（日本雑貨の輸入）、松村洋行（大豆輸出）、金福洋行（大豆輸出）の9店が営業していたと報告している[17]。職種でめだつのは大豆の輸出商であり、営口が大豆市場としての関心をあつめていたことを示していよう。居留民も1903年6月には152名に達し、職種では貿易商（戸数8、25名）が多かった[18]。

ロシア軍の軍政は直接的な危害を日本人に加えはしなかったが、日本とロシアの緊張が増してくると、日本人居留民は営口にとどまるか、引き上げるかの判断を迫られることになった．1903年10月にはロシア軍が撤兵しないため日露開戦のうわさがひろまり、商業取引も難しくなった[19]。そして、1904年2月の日露開戦により営口から日本人は引き上げた[20]。

1）営口商工公会『営口日本人発展史』1942年、13、64頁。
2）仁川在勤林領事ヨリ岡部外務次官宛「郵船会社カ開キタル牛荘定期船ノ件」明治24年5月13日『日本外交文書』第24巻、1952年、360～361頁。
3）「牛荘近況」『官報』3076号、1893年。
4）『山本条太郎伝記』1942年、86頁。山本の営口訪問を1890年と記述する文献もある（金子文夫『近代日本における対満州投資の研究』近藤出版社、1991年、33頁注12参照）。
5）「牛荘港視察ノ記事」『通商彙纂』6号。1894年。
6）「営口付属地沿革史（上）」『満鉄調査月報』12巻6号、1932年、171頁。『満鉄付属地経営沿革全史』中巻、1939年、289頁では40数名としている）
7）小峰和夫「日清戦争後の日満貿易の成長」『日大農獣医教養紀要』24号、1988年。
8）営口領事館書記生本子熊太郎「牛荘港ニ於ケル本邦商估ノ状況」明治29年7月21日（外務省外交史料館3－3－7－13「本邦人外国ニ於テ商店ヲ開キ営業スル者氏名住所営業ノ種類等取調一件」）
9）同前。
10）「牛荘三十一年十二月在留本邦人々員表」『通商彙纂』123号、1898年。
11）1899年に農商務省は営口に商品陳列館を開設した（通商産業省『商工政策史（貿易上）』第5巻、1965年，306頁）。もっとも運営はうまくいっていなかったようで、1902年に訪れた日本人は、「物品ハ久シキハ一年前ニ到着セシモノニテ各品ニハ単ニ製造者ノ氏名住所及代価ヲ記セル票紙ヲ添付スルノミ」という状態であった（外務省外交史料館3－2－1－18「大蔵省鑑定山岡次郎提出対清貿易ニ関スル上申書」1902年）。
12）『日本人物情報体系11　満洲編1』76頁、『営口日本人発展史』1942年、66～67頁。
13）『日本人物情報体系11　満洲編1』383頁
14）1895年営口に渡る。日露戦争には通訳として従軍。1906年に三井物産に入社し、営口出張所に勤めた（『日本人物情報体系12　満洲編2』261頁、463頁）。
15）1897年に営口に渡り、福富洋行に勤め商売について学んだ。その後も営口で商売を続けた（『日本人物情報体系11　満洲編1』374頁）。
16）中国社会科学院近代史研究所『沙俄侵華史』第4巻上、人民出版社、1990年、285頁。営口のロシア軍は日露戦争開始まで撤兵せず、ロシア軍の軍政は日本軍が営口を占領する1904年7月まで事実上は継続していた。
17）木村彖市『北清見聞録』1902年、121頁。
18）前掲「清国在留本邦人職業別表」。
19）前掲「日露開戦説続報ノ件」892頁。
20）引き上げの状況については、前掲『営口日本人発展史』98～100頁を参照。

(2)　旅順・大連の日本人

旅順は清朝が北洋艦隊の基地として建設した軍港であった[1)]。極東進出をはかっていたロシアは1898年3月に旅順を租借地とし、その大拡張を行い、太平洋艦隊の根拠地にしようと考えていた。また、旅順と同様に租借地とした大連は一大貿易港にする計画を立て、その建設に着手した。ロシアによる旅順、大連の建設は建設労働者の需要を生んだだけでなく、流入したロシア人を顧客にした商売も可能としていた。こうした状況を営口領事は1901年8月に、以下のように報告していた[2)]。

> 金州半島カ露国ニ租借セラレタル以来、日ヲ経ル僅ニ三年ニ過キサレトモ、其間本邦人ノ該地方ニ入込ムモノ年々著シク増加シ、殊ニ過般浦塩港ニ於テ輸入重税ヲ賦課シタル結果、該港ヨリ移住シ来ルモノ亦甚タ少カラスシテ、昨今ハ旅順口、青泥窪及大連湾ヲ併セ、無慮六百以上ニ達セリト云フ。

表2　旅順の人口

		ロシア人	日本人	中国人	その他
1901	男	6044	378	15908	914
	女	1990	390	1793	187
	児童	598	111	879	57
	計	8632	879	18580	1158
1903	男	15651	339	18134	189
	女	1130	316	2775	76
	児童	828	23	2585	16
	計	17609	678	23494	281

注；1901年の日本人には朝鮮人が含まれている。
出典；満鉄調査課編『露国占領前後ニ於ケル大連及旅順』1911年、48頁、関東庁『露治時代ニ於ケル関東州』1931年、172頁より作成。

旅順はロシアの関東総督が駐在する、ロシアによる極東経営の根拠地であったため居留するロシア人は多く、在留日本人も多かった（表2参照）。だが、軍港という性格から輸出貿易は難しく、「旅順口ニハ輸出スヘキ貨物ナク、只鉄道建築等ノ材料及陸海軍人其他居留民ノ日用品ヲ輸入スル

ヲ以テ重ナル商業トナ」す、という状況であった[3]。それゆえ、旅順に流入した日本人は在留ロシア人を相手にする商売を営んでいた。例えば、川上賢三（1864年佐賀県生）は1884年にウラジオストクに渡り、ウスリー地方で土木工事の請負いをしていた。1898年にロシアが旅順を租借して軍港建設を始めたことに目をつけ、旅順に移り建設請負業を行った[4]。山下五郎（1868年熊本県生）は1896年頃にロシアに渡り、ウスリー鉄道の建設請負いをした。1899年に旅順に移り、東支鉄道会社の指定商人となり石炭や枕木を納入していた[5]。旅順に流入した日本人は、まずウラジオストクやシベリアに渡り、ロシア語を習得するとともにロシア人との交流を学んだ人が多かった。

旅順に居留した日本人のなかで、最もロシア語にたけていたのは日野文平（1860年宮城県生）であった。日野は1872年に上京してロシア語を学び、1880年に長崎ロシア領事館の通訳となった。その後は転々と職をかえたが1902年に旅順に渡った[6]。1903年に旅順を視察した外務書記生の高橋新治は、日野について以下のように述べている[7]。

> 日野ハ外国語学校ノ出身ニシテ年齢四十五六、…在留邦人中最モ能ク露語ヲ解シ一般ニ重宝ガラレ、終ニ有給総代（年額千留）ニ推薦セラルヽニ至リ、且ツ露ノ官辺殊ニ軍人側ニ比較的多クノ知己ヲ有シ、現ニボヤーリン号少尉アンドレー、デーリーウロンノ日本語教授ニ任ジ、毎日同号ニ臨教シ、且ツ其依頼ヲ以テ日露字典、日本歴史ノ翻訳ニ任ジ、尚ホ此外各般ノ請負業ヲナシ居レリ。

ロシア人相手の商売以外で、旅順に多かった日本人は売春婦であった。1902年10月に旅順を訪れた中国史研究者の内藤湖南は、「旅順に於ける日本人は五百乃至六百の間に在り、勿論その半数は例の醜業団（注；売春婦）なり」と記している[8]。1903年6月時点での旅順の日本人は775名、そのうち男性が456名、女性が319名であった。男性の職業で多いのは大工、洗濯、雑貨販売、雑業などであった。女性は「貸席」が112名を数え、女性全体のなかでは35％を占めていた[9]。

旅順でも営口と同様、日本商人の前には競争相手として中国商人が存在した。1903年に旅順を調査した横浜税関の調査団は、次のように述べている[10]。

> 清商ノ常ニ商業ニ機敏ニシテ相互連絡ノ密ナル。此等ノ新開地ニ在ルモノニテモ能ク本邦在住ノ清商ト相呼応シ、随時嗜好ノ貨物ヲ低廉ニ仕入レ、注文期日ヲ違ヘスシテ供給販売スル等ノコトアルニヨリ本邦商ハ獲利ヲ先ンゼラレ、為メニ損耗ヲ招クコトナキニアラズ

旅順のような新開地でも日本在住の中国商人とたくみに連絡をとり、商品を仕入れて安く販売する中国商人は、日本商人を脅かしている状況を報告している。

1901年の時点での大連のロシア人は1518人と旅順に比べて少なかったが、1903年には1万4434人に急増し、旅順に追いつこうとしていた（表3参照）。日本人も旅順に比べて少なく、とくに女性が少ない。日本人売春婦の人数は旅順に比べて少なく、訪問した内藤湖南も大連に日本人売春婦はいることはいるが、旅順ほどではないと記している[11]。大連の建設は日露戦争前では着手された段階にすぎず、市街の建設はまだ途上にあった。それゆえ日本人も建設工事に関係する人が多く、「本邦居留民ニシテ商業ニ従事セル者ハ尚ホ甚タ稀ナルモ、直接若クハ間接ニ工事ニ関係アルモノ亦タ少カラス」と1901年では報告されている[12]。

表3　大連の人口

		ロシア人	日本人	中国人	その他
1901	男	1219	290	19065	21
	女	159	12	2220	1
	児童	140	12	2483	—
	計	1518	314	23768	22
1903	男	7572	257	24010	68
	女	3426	37	1860	9
	児童	3436	13	569	3
	計	14434	307	26439	80

出典；満鉄調査課編『露国占領前後ニ於ケル大連及旅順』1911年、16頁より作成。

ロシアは大連を貿易港に育成しようと考えていたが、日露戦争前では鉄道の運行が順調ではなく、輸入品を大連から満洲奥地に送ることや、輸出品を満洲奥地から大連に輸送することは難し

かった。それゆえ、とくに輸出は振るっていなかった。その様子を領事報告は次のように述べている[13]。

ダルニーハ目下専ラ工事ニ関スル材料船舶鉄道用ノ石炭及居留人日用雑貨ヲ輸入スルニ過キスシテ、其輸入品カ遠ク内地ニ分布セラルゝニ至ラス。輸出品トシテハ営口、奉天、鉄嶺地方ヨリ豆、豆粕等ノ輸出ヲ試ミル者アル由ナルカ、鉄道ノ便完成セサルゝヲ以テ、未タ輸出品トシテ数フヘキモノナシ

輸出貿易を行える状態が整っていないため、1902年1月から9月（ロシア歴）までの大連の輸入額318万ルーブルに対し、輸出額はわずかに2万ルーブルであった[14]。鉄道が規則正しく運行され、満洲内の農産物が大連に集積され、大連から大量に輸出されるようになるのは日露戦争後であった[15]。このため、日本人の特産物商が大連で活動するようになるのも日露戦争後であった。

旅順、大連の日本人も、日露戦争勃発後にそのほとんどは引き上げた[16]。

1）王家倹「旅順建港始末（一八八〇―一八九〇）」『中央研究院近代史研究所集刊』5、1976年。
2）「清国旅順口青泥窪並大連湾地方在留本邦人情況」『通商彙纂』200号、1901年。
3）「旅順口並大連湾情況」『通商彙纂』247号、1903年。
4）『日本人物情報体系11　満洲編1』163,355頁。川上は日露戦争後には大連に移り、運送業などを営み、大連市市議員にも選出された。
5）『日本人物情報体系11　満洲編1』171頁、『日本人物情報体系12　満洲編2』174頁。山下は日露戦争後には安東に移り、材木販売を営んだ。
6）『日本人物情報体系11　満洲編1』184頁、『日本人物情報体系20　満洲編10』164～165頁。
7）芝罘水野領事→小村外相「旅順口会議其他ニ関スル報告ノ件」明治36年7月18日（『日本外交文書』第36巻第1冊、1957年）819～820頁。
8）「遊清記」『内藤湖南全集』第四巻、筑摩書房、1971年、333頁。
9）前掲「清国在留本邦人職業別表」。
10）横浜税関『清国芝罘、威海衛、青泥窪、牛荘、膠洲及上海視察報告書』1904年、161頁。
11）前掲『内藤湖南全集』337～338頁。
12）前掲「清国旅順口青泥窪並大連湾地方在留本邦人情況」。
13）前掲「旅順口並大連湾情況」
14）「ダルニー市人口並貿易近況」『通商彙纂』247号、1903年。
15）大連における大豆貿易の発展については、拙稿「満洲事変前、大豆取引における大連取引所の機能と特徴」『東洋学報』81巻3号、1999年参照。
16）旅順からは1904年2月8日に第一陣が引き上げ、第二陣の引き上げは旅順沖で戦闘が8日夜に始まったため15日に行われた（『露治時代の旅順』旅順図書館、1936年、24～29頁）。1904年5月に日本軍が大連を占領した時、11名の日本人がいたという（『大連市史』大連市役所、1936年、237頁）。

(3)　奉天・遼陽の日本人

営口や旅順などの沿岸部ではなく、奉天や遼陽などの内陸部に居住する日本人も少数ながらいた。

日本人が奉天に居住したのは1901年であったらしく、1902年1月の調査には写真業、ラムネ製造業、理髪業、洗濯業など「主トシテ露人ヲ相手ニ営業」する商売を営み、総数36名が居住していたとある[1]。奉天も義和団事変後、ロシア軍の占領下に置かれたことからロシアの勢力が強く、居留日本人もロシア官憲の顔色をうかがいながら営業していた。1902年3月の調査報告には以下のようにある[2]。

一昨年来本邦人ノ該地ニ入込ムモノ続々トシテ起リ、目下在留者四十餘名ニ上レリ。然レトモ過半数ハ婦女子之ヲ占メ、稍真面目ナル職業ニ従事スルモノハ「ラムネ」製造業一戸、写真業二戸、理髪業一戸、洗濯業一戸アルノミニシテ、雑貨店ノ如キモ未タ開舗セラレタルモノナシ。是等ノ本邦人ハ皆露西亜警察署ノ管理ノ下ニ立チテ職業ニ従事シツゝアルモノニシテ、開業スルニ就テモ一ニ警察署長ノ許可ヲ竢テ始メテ行ハルゝモノニシテ、且其間種々ナル事情ニ遭遇シ、遂ニ為スナクシテ空シク引キ返ス者アルハ屢々見聞スル所ナリト云フ。

薬種業の卸しとラムネ製造をしていた望月実太郎（1873年広島県生）は、東支鉄道の請負いにより元手をつくり、1898年5月にハルビン経由で奉天に来た。東支鉄道の建設とかかわったことが、満洲で商売を行う決意を望月実太郎にさせたと考えられる[3]。写真店を営んでいた永清文次郎（1869

年長崎県生）は、1900年に旅順を経由して奉天にやって来た。永清文次郎は奉天草分けの日本人であり、日露戦争後も奉天で活動を続けた[4]。

遼陽に居留した日本人も売春婦が多かった。1903年の報告には奉天と遼陽を比較して次のように述べている[5]。

> 目下奉天ニ在留スル日本人ハ洗濯屋一戸、理髪店一戸、写真屋一戸、ラムネ製造屋一戸、貸席二戸ニシテ娼妓十五六名在留シ居ルモ、近来ハ頗ル不景気ナル由ニ侯、然ルニ遼陽ニハ貸席四戸娼妓四十名アリテ内ニ二十七八名ハ城内ニ住シ、目下頗ル繁昌シ居ル由ニ侯。

奉天の売春婦は15、6名であったのに対して、遼陽には40名いたとしている。

長春へも日本人は流入していたが、その大半は売春婦であった。1902年3月の調査には「本邦人ノ在留スルモノ三十餘名殆ント皆浦監斯徳港ヨリ轉住セシモノニシテ、婦女子多数ヲ占メ雑業ニ従事スルモノアレトモ、未タ擧グルニ足ルモノアルナシ」と報告されている[6]。1903年6月の領事報告によると、鉄嶺、開原、大石橋でも最多の職業は「貸席」に従事する女性であった[7]。

1）営口田辺領事→小村外相「奉天視察報告書提出之件」明治35年3月8日（外務省外交史料館6－1－6－42「牛荘領事館報告書」）。
2）「東清鉄道附近商況視察報告書」『農商務省商工局臨時報告』明治35年第12冊、23頁。
3）『日本人物情報体系20　満洲編10』155～158頁
4）『日本人物情報体系11　満洲編1』62頁、『日本人物情報体系12　満洲編2』288頁（永清文治郎となっており文次郎の誤植）。また永清文二『満洲奉天の写真屋物語』東京経済、1999年も参照。
5）営口瀬川領事→小村外相「満洲ニ於ケル露国ノ動静報告ノ件」明治36年5月4日『日本外交文書』36巻1冊、846頁。
6）前掲「東清鉄道附近商況視察報告書」82頁。
7）前掲「清国在留本邦人職業別表」。

結びにかえて

日露戦争前に満洲に流入した日本人は、ロシアによる東支鉄道や旅順・大連の建設を契機に満洲にやって来た人と、営口へ対日貿易を目的としてやって来た人との二種類に大別できると言えよう。こうした特徴は、日露戦争前に満洲を旅行した稲垣伸太郎も次のように指摘している[1]。

> 満洲に入り込んで居る我日本人は、総数既に三千人に近いであろうが、今之を進入の経路により色別をするといふと、二様の系統に大別することが出来るのである。即ち露領より流れ込んだ系統に属する者と清国方面から漂着した系統に属する者とである。商人でも哈爾濱に居る者は多くは露西亜系に属して、営口に居る者は支那系に属して居る。旅順青泥窪は何ちらかと言へば無論露領の落武者が多い。…
>
> …満洲なる実體を研究する上に就いても、支那通は専ら支那の勢力上よりし、露西亜通は専ら露西亜の勢力上よりするので、其観察動もすれば一半面に過ぎ無いのは遺憾の至りである。満洲の真相は是非之を両面の観察に挨たねばならぬ。

ロシア系と中国系に大別される在満日本人の双方を考察する必要性を主張している。

職業の特徴としては、大工などの建設労働者、ロシア人を相手にした雑貨商や洗濯屋などの零細な資本でも開業できた商売が多く、女性は圧倒的に売春婦であった。対日貿易に従事する日本商人は、小人数が営口に存在したにすぎなかった。人数的にはロシア人を相手に建設請負いや商売をしていた日本人が大半を占め、そこに日本の国権伸張的色彩は乏しかった。

日露戦争により、ほとんどの在満日本人は引き上げを余儀なくされた。戦後に戻ってきた日本人も多かったが、在満日本人をめぐる状況は大きく変化した。第一に、旅順、大連が日本の租借地となっただけでなく、開港場は営口1港から17港[2]に増えた。また、満鉄付属地においては日本人が行政権を行使できた。このため、日露戦争後ではロシア官憲の顔色をうかがいながら居住、営業する必要性は大きく低下した。第二に、日本人の人数が急激に増え、日本人を顧客にした商売が可能となった。1903年では約2500人であった在満日本人は、日露戦争後の1908年には約5万8000人に、1914年には約10万人に増えていた[3]。満鉄社員や関東州の役人といった日本人を相手にする商売が、日露戦争後には生まれたのである。こうした変化を『営口日本人発展史』は、以下のように述

べている[4]。

> 戦前（日露戦争）の邦人数十人は、支那貿易に遽て立てり。貿易に従事せずも支那人社会を地盤に立ちしかば、支那側と密接なる利害の関係ありしが、戦後は僅少なる純貿易業者を除き、支那側と分離し、両者の社会互に其肥瘠に不関係となれり。

営口では日露戦争を契機に、居留日本人は中国人社会と離れ、日本人社会のなかだけで生活していけるという変化が生じていた。同様にハルビンや旅順でも、ロシア人社会との関係なしに、日本人だけで暮らしていける状況が生れていたと考えられる。また、日本人女性に多かった売春婦は日露戦争後でも消滅しなかった。消滅しなかったばかりか、その活動範囲は満洲全域に及び、満鉄沿線から離れた奥地に暮らす日本人女性の大半は売春婦であった[5]。

ロシア人を相手にするにせよ、中国人を顧客にするにせよ、日露戦争前に満洲で活動した日本人には、日本人以外の人達と交渉する能力が必要であった。そして、不安定な居住権や日本とは異なる状況に対応していくことが求められた。だが、日露戦争によりこうした状況は一変した。日露戦争後に満洲へ渡って来た日本人は、当初は日本軍を、日本軍が撤退した後は在住日本人を相手に生活する人が多数を占めた。日本人だけを相手にしても、満洲で暮らしていける状況が日露戦争を契機に誕生したのであった。

1）稲垣伸太郎『満洲の話』白山黒水社、1904年、98～99頁
2）奉天、安東、鳳凰城、遼陽、新民屯、鉄嶺、通江子、法庫門、長春、吉林、哈爾浜、寧古塔、琿春、三姓、斉斉哈爾、海拉爾、愛琿、満洲里。
3）副島昭一「戦前期中国在留日本人人口統計（稿）」『和歌山大学教育学部（人文科学）』33号、1984年、18頁。
4）前掲『営口日本人発展史』117頁。
5）例えば、1916年の双城堡では在留日本人女性135名のうち、72名が売春婦であったと報告されている（「東支鉄道沿線事情」『通商公報』446号、1917年）。

（2000．11．20　受理）